

1 4 7. 異常がいずれは平年並

技術戦略部次長 三宮 武

9月10日と言えば、下水道関係者には馴染みの深い「下水道の日」です。下水道は、一般の方にとってみれば、今でこそ汚水処理対策のイメージが強く意識されていますが、元々は、浸水対策から出発しています。それが、「立春から数えて220日」という台風シーズンを「下水道の日」と定めた所以でもあります。今年の9月10日、台風18号から変わった温帯低気圧が関東地方に大雨を呼び込み、鬼怒川の堤防が決壊する大被害が発生しました。被災した方々には、改めてお見舞いを申し上げます。

さて、その台風ですが、『何となく今年は台風が多いな』と思い、確認してみたところ、平年とは異なる話題性のある多くの台風が発生していることがわかりました。

まず、今年の台風1号は、既に1月9日に発生していました。日本への影響はほとんどありませんでしたが、フィリピンでは水害や土砂災害が発生し、被災者は約11万人と言われていました。ゴールデンウィークが明けた5月9日には台風7号が発生しました。7号までの台風の発生時期としては、観測史上最速のペースだそうです。梅雨時には、9号、10号、11号の三つの台風が同時期に存在するという事態になりました。さらに、台風12号は日付変更線よりも東側で発生したため、当初は台風ではなく、ハリケーンとして位置付けられましたが、後に日付変更線を越えて、台風12号となりました。この台風は一度、熱帯低気圧に変わった後に、再度発達して台風となり、我が国に上陸しました。日付変更線を越えた“越境台風”が上陸するのは、観測史上2度目だそうです。そして、大被害をもたらした台風18号、さらにその後も台風は発生を続け、10月中旬にして台風25号まで数えられるに至りました。観測が進んだ1951年以降では39個(1967年)が年間としては最多発生記録だそうです。今年も異常と言える部類に入るのではないのでしょうか。エルニーニョ現象など、数年に1回起きる現象の影響もあるかとは思いますが、多くの方が、地球温暖化の影響も指摘しているところです。

気象に関してもう一点、気温や降水量などについて、「平年並」、「高い(多い)」、「低い(少ない)」などの階級が使われるのをしばしば耳にします。これは30年間の観測値を並べて、小さい方から10番目までを「低い(少ない)」、大きい方から10番目までを「高い(多い)」、その間を「平年並」としているとのこと。データは10年ごとに更新され、現在のデータは、1981年から2010年までのデータが使われているとのこと。

「データを更新」と言うことは、「平年並」の基準も変わるということを意味します。私は神奈川県出身で、高校生の頃、(もう30年以上も前のことです!)夏の炎天下で毎日野球をしていましたが、「気温35℃」というのは、ほとんど記憶にはありません(もちろん、日向は35℃以上になりますが)。寝苦しい熱帯夜(夜間の最低気温が25℃以上)というのも、その頃は、何年かに1回程度の頻度ではなかったかと思います。「日射病」という言葉はありましたが、「熱中症」という言葉は、なかったはず。

台風が30個も40個も発生するのも、(しかも、そのうちいくつかは、超巨大で猛烈な台風も…)夏の気温35℃が「平年並」となってしまうのも、そう遠くない未来に来る恐れは十分にあります。それを見越した防災と減災が必要になるかもしれません…。

参考資料：気象庁ホームページ他